

門へ遠13  
2208  
巻 28

星月夜頭晦録六編卷之三

目録

○ 後鳥羽院義時誅伐の企録倉勢飛向合戦

佐々木四郎左衛門尉信綱宇治川先陣の圖

○ 官軍敗北録倉賞罰の沙汰有る四海静謐に

後鳥羽院龜菊明石の浦ゆゑ詠歌の圖

春時新君頼經卿を補佐し太平を致せ

星月夜頭晦録六編卷之三

後鳥羽院美時誅伐の企鎌倉勢発向合戦

云浦判官胤美在京せしと仙洞より頼子頼房に頼るる早

速の味方仕見駿河守美村と頼の上日本摠追捕使を賜んとす

速の味方仕んとす故涉感あり早く語るべしと宣ふをその兄の

方へ私に申せしける新院門院も仙洞へ此度の企甚然るべしと

申練る按察使中納言光親も屢練せされけは東の味方入

り新院宣の事を強く命せり又主上も仙洞と同心あり

百五木や旧きお増はるのふも授あやうなる昔んく事

と詠つるひ當四月の位と若宮懐成親王子譲り依りし門

院と中院順徳院とぞ新院と改称する仙洞新院の心とす

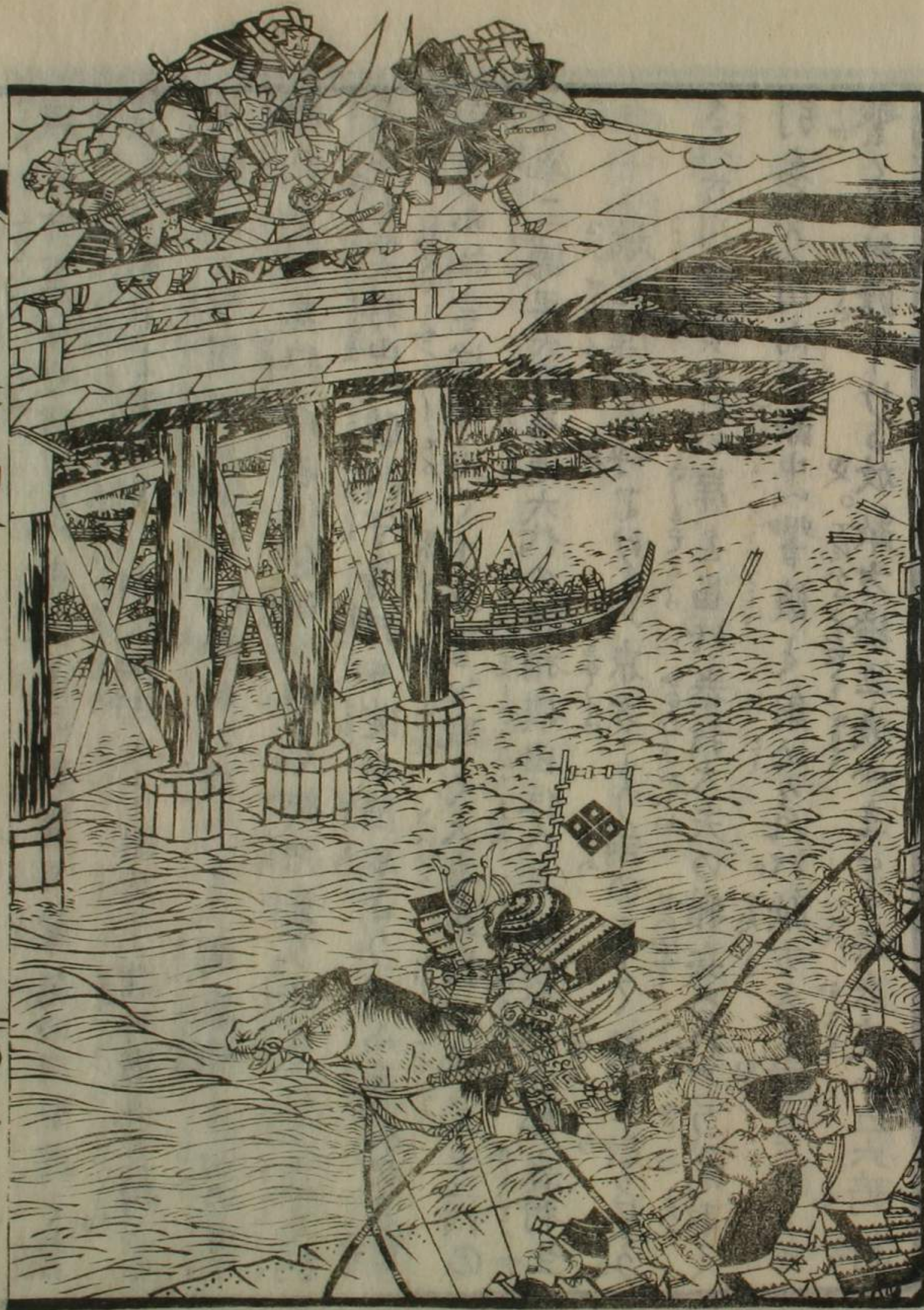


義時追討のりよと計せり。其時五歳内より尾列に兵中園筋  
 十四ヶ園を添る兵一千七百餘騎へ宗徒の者共々先公のうら彌倉  
 幼君の親身西園寺公経公。子息中納言実氏々八閑東に現けし。六  
 院中召く押籠置京都の守護佐々木左門尉廣綱大江杖  
 唐入道と召く。直々の頼史。又味方仕しが伊賀判官光季謙  
 倉の令あり在京せしが。義時が妻の弟故。閑東へ赤脚をきし。此  
 付茂の根子と住進しける。早官軍八百餘騎あり。光季が京極  
 の旅宿と取巻攻ける。上へ主従方の限防戦し。残らば討きたり。  
 光季が息壽王冠者十四歳あり。父に隨ひ上京せし。と光季落  
 さんと云けれども。安入に健氣の働しく付死を期す。三浦胤茂が  
 蜜使鎌倉を急す。此使を推松と云く。安入の逸足あり。胤茂が出

簡の外に院宣七通を拵先三浦茂村が謹み判り。蜜書を出せば。  
 大い駭き使を追出。直に義時方へ至る。第の書面をよみせ。  
 其中に右大将家の恩を忘るべし。と云く。此度へ由り敷大直に疾  
 尾公へ中より。此と有ゆ。北条義時も仰天。俱に尾公へ添く。評  
 議ふ及ぬ。光季が飛脚到着し。殊明白に相告へる。よつと諸  
 臣疎らば召出され。各鎌倉の忠を尽す。仙洞へ味方す。た怨む  
 ぐ。唯今切ふ中定し。と有ければ。皆一同に鎌倉の恩を受し。  
 我々京に攻登尸を禁中不肆し。寸忠を願ひ。いづれに也。清中  
 けし。バ尾公大い悦ぶ。推松を尋し。老翁のふ笠井が谷めく。捕へ来  
 けし。バ持し。院宣を焼捨。推松へ追拂歸されたり。夫れを諸置の  
 分と定む。五月廿一日鎌倉と進兵を先陣に北条相模守時房二

陣北条式部太輔泰時三陣を足利常陸前司義氏四陣三浦  
 駿河守義村五陣八十葉介成胤を大将めく。國々の諸士を従へ  
 毛利佐原狩野後藤葛西中村大須賀伊佐熊谷足立兎玉  
 猪俣相馬を始としく。五万餘騎と安へける。此輩ハ東海道と地  
 又武田小笠原逸見浅利を大将としく。一万餘騎ハ東仙道と  
 向ひ名越式部源朝時相模次郎を大将としく。北陸道よりも一  
 万余騎を向られけり。京都ハ此沙汰安へけり。宇治勢田めく  
 防んや半途と出向んや評浅決一難き内関東勢も急馳上る官  
 軍ハ能登守秋安を將としく。糟谷朝日岡田関佐木足助白井  
 山田長瀬錦織泰の輩一万七十五百餘騎六月四日ハ尾張川ハ着  
 陣。仙洞の巾旗赤地の錦の領中ハ金剛鈴を結付中ハ不動明王

四天王を畫するを十流流上り。関東勢ハ翌五日ハ尾張國一宮  
 不着摩兔の川向るを敵方箭一筋を射渡せしと上る。朝比奈  
 三郎義秀と書付あり。諸軍大ニ恐と叔々朝比奈和田合戦ハ落  
 失行衛ささるる。今官軍ハ在るよと兼くの剛勇ハ  
 懲る者ヲ天狗の如く以居る。如く皆色を失く。惣大将  
 時房此箭を取寄改るを泰時側より熟見く。見ハ敵の謀て  
 味方の銳氣を折んる。此箭ハ十四束二伏あり。義秀ハささく矢  
 束を射る。丈夫あり十二束許ハ死せる孔明生る仲達を走しむ  
 ちればハも臆さる。とるんと觸られ諸軍頓ハ氣を取直し。然し  
 川村三郎ハ下知し。彼箭を射返さし。東山道よりより。百ハ同  
 困大井の渡不着。武田五郎信光の子息小五郎先陣ハ進川を



佐々木 信綱 宇治川 先陣の 圖



渡し官軍を打破けし東海道の諸軍も摩兔の川を渡り官軍を打敗京方鏡右衛門尉久綱踏止討死し其外戦死生捕らる者夥しく官軍皆逃登宇治勢田を固えたり。関東勢の初軍勝利され其勢宛を竹を破ぐおとく。押詰あり。時房ハ田原足利義氏と栗粉山小駿河守義村と淀み陣取り。時小義村の息男諸軍お抽宇治橋近く下立曾と脱く大音お桓武天皇十二代の後胤三浦平大夫為通六代の孫相模国住人三浦駿河次郎義村生年十八歳先陣と叫びけし。京方より兩のおとく箭を射り。され川幅廣々れば岸を届ば義村大夫の精兵を引取り。引おり。川向の敵中へ響渡り射止れば敵方大に驚きける。矢撃くも射渡りける。故敵方強立表ふまける。兵矢度ふ五六騎射

落され官軍此の大將甲斐宰相兼引退く。関東勢徒早義村軍を初とぞ。劣なりと川端お押寄けし。橋の板は如官軍お山門の大衆加す。橋の辺お船三百艘の餘も有。奈良法師熊野法師など不動金伽羅勢多伽の像を画し旗を押しかき。川岸お乱杭逆茂木お緊く。結おれば唯剛弓精兵の面く。矢軍の外おりけり。あふ奈良法師覺心圓志らどいふ。が。関東勢と嘲哂せん。橋桁の上を走り出長口振廻り踊舞く。戲おける。東國勢悪死奴原が挙動うか。あれ射落し。云まふ。矢先を汰と射まらる。圓志ら左の足の巨擘を橋桁お射付たり。足働く。拔んとされ。あふ射止れば。技を覺かすと寄く。射付ける。指をうつと切捨肩お掛翔狂く引入る。関

東方波多野五郎信政橋桁を渡らんとせしが山法師たよ右の眼  
と射らと已み川へ陥んとせし公即水走あり肩ふりけり引退く塩  
屋左衛門尉家友同く橋桁を傳ふを悪僧たがえく射る前  
足と橋桁射付らと其子六郎左衛門家氏おれ口惜と親を乗越  
矢面立塞戦ふ間家友足の矢と被るも被り自ら大方めく  
足を切割ると家内介抱し引退くかくも味方損もまされ  
先且軍を止め謀慮ありんと惣大将の下知故皆陣を堅く居  
りる。東海東山の両より此外落合るが北陸道より向ひ朝  
時ハ五月晦日越後國府中不着蒲原の殺所を越く市振ふる處  
み宮崎左衛門尉政時と云りの近辺の溢者三百餘人を山上お登せ  
と張儲敵より弛楯と下知り。勢を以途中を支喰餌んとせり

小関東方み加地入道謀を案ト近辺の在家み人をせし七十四の  
牛を牽来りし雨の角み續松を結竹日の暮を待彼炬火み火を  
點し道筋を追續れば切所み喰餌人とせし族敵みあてて牛へ  
大み驚き右往左往み敗走き山上より身を見をんと頃哉此時そと怒を  
有限一同みとつと發せんべ天地も崩るごとく餘りの牛と味方の  
凶走るを一時み打斃る跡み續く関東勢曳く声ゆく押程み  
難く夜通し弛或も山越し又も海の浅瀬の岸を打せし越中  
加賀の境るる砥並山み出ける不行先官軍一味の者所みまけ  
大軍を以打破つ。海津の浦より今津の宿と經く京師へ急ける  
官軍敗北鎌倉賞罰の沙汰有と四海靜謐と  
時み北条泰時家子芝田橋六を召寄川の瀬踏をささるをこと佐



木四郎唯一騎御局と云粟毛の長八す小餘るる逸物ふ打栗二岐の  
 瀬ふ打入瀬枕を切くく小渡一。近江國の住人佐々木四郎左門尉  
 源の信綱宇治川の先陣と呼び是をえりて關東の諸勢打入く  
 渡一々る水も壅とて陸へ海こそ成々舟中ゆも弱へ押流され  
 死する者尋らるる後ふ人数を尋らば八百餘人へ溺たり。されども  
 大軍さば屑とせば京方下合く散く防戦されども東軍の勢  
 猛く官軍討りと數をえりて京方右衛門佐朝俊もあふ討死し。甲斐  
 宰相範茂ハ涼子を肩山法師惡僧ホも討せし落夫官軍太  
 效軍一これハ關東の諸勢今も皆川を渡り。御所へ向く押寄り。  
 京方能登守秋安三浦判官胤茂山田次郎重忠ホ散く小打ち  
 され郎等た落失く頼影る。仙洞の場所へ集れば仙洞も今ハ

せん方形一武士た何方へも落行べと突放さるとは山田次郎  
 大音小大臆病代君小語とる残念さると。嵯峨野の方へ落行  
 が敵不取用と腰切く死す。三浦胤茂も西山ふと自害し。  
 天野四郎左門へ降人ふと誅せし。後藤判官基清を降人ふ  
 知らる。残免さるとは予息左衛門尉基綱軍功ふと切く  
 他人ふ切せ死骸を中とて孝養とせんと。諸人ふ批判せしと  
 又名。清水法師鏡月房同弟子常陸房美濃房ホ摺合せし  
 己ふ誅せらるる死知ふ。辞世の歌を詠らる。  
 物ぬきと成はまはる。武士は八十字流川の瀬ゆきまど  
 北条泰時此歌を感し師弟三人の縛を解免し。帰しける一首の  
 詠奇三人の命を保三十一文字の徳高きと実や紀貫之が古今集

の序を書るおと。京都守護人ぬく味方やせり。佐々木大江  
 兩人も乱軍討死。関東勢を仙洞の所四辻へ推寄る。日  
 来の心猛ふ似ゆ。院宣を成下さ。此度の合戦敵慮起む。  
 謀臣ホカヤ行ぬ。自今以後武勇不攜者召仕。前非  
 を悔く。此度不及と。権中納言定高奉。北条時房へ名宛。時房  
 院宣を賜る上失敬も如何と。諸勢を押し六波羅の館。移鎌  
 倉へ注進せんと。敵味方戦死。負妻細不書誌。中太弥三郎を以  
 飛脚。此注進鎌倉不到。尼公諸老臣。いづと中心を痛め  
 る。不味方勝利。史尼公涙を流し。悦ぶ。京都の仕置を評定。大  
 江廣元入道。先規を勘。云院宮へ遠流。月卿雲客。関東へ  
 召下と。と披露。路次ぬく失。京都の政へ公。經卿。當知君  
 の外祖

也沙汰有。撰政へ前。奥自家。実公。参せ。と。と。皆。是。不。同。  
 七月六日。武士大勢。院の。所へ。馳。奔。鎌倉の。命。と。網。代。車。の。寄。け  
 ちる。を。寄。仙。洞。を。無。理。不。乗。せ。を。り。左。右。打。田。と。鳥。羽。殿。へ。移。  
 出家を勧む。故。年。四。十。三。歳。ぬ。法。躰。あり。又。當。今。の。位。位。公  
 下。漸。七。十。餘。日。ぬ。廢。帝。と。成。多。故。高。倉。院。第。三。の。皇。子。守。負  
 親王入道。と。ち。ろ。ろ。其。子。十。歳。ぬ。成。る。を。位。位。不。即。父。入。道  
 を。太。上。法。皇。と。号。し。當。年。十。二。月。ぬ。即。位。の。式。行。は。後。堀。河。院。と  
 中。是。坊。門。大。納。言。忠。信。卿。へ。仙。洞。へ。味。中。也。千。葉。人。成。胤。関。東。へ  
 具。一。つ。た。処。故。実。朝。公。の。中。基。巾。飾。を。下。り。今。六。京。都。ぬ。在。西  
 八條の禪尼と。坊門大納言。兄也。尼公の。許へ。命。乞。ひ  
 了。く。赦。免。の。也。使。遠。江。國。舞。坂。ぬ。行。逢。助。命。ぬ。越。後。國。へ



の官軍の加つて三河佐と木の子供幼少るる迄も悉く誅しけり  
摠大将時房の泰時と俊小都小在る成敗を取行ひ七月十三日へ仙洞  
を隠岐國へ送りける此時左府へは多小君柵とてと書奥小

雲深の袖は情をけり涙をり毛朽もあそす  
供ゆら殿上人二人女房一人白拍子亀菊のそん都を立ち水無瀬殿  
を内覽ト申りせめく爰小在るやと心召つたけり

立籠る突とるるくくを海淵川旁に曉ぬ初来乃空  
播列小着多ひて何國ぞと尋るふ也へ明石の浦と申上り  
初夜をくくかきりてそわいど月を明る乃満は急なり

白拍子亀菊もあつた  
月影をさそ明る法満るれど雲井の影ぞ移もあつた

美作と伯列との中山を越せせぬ道小細き街あるを何國への道と尋  
るふ都への古道と申上り千代の古乃をくく初も近くるべしめと

舟人誰ぞうろく通ひえん向ひ乃乃をきぬつらしたのれ  
出雲国大濱の湊見尾が崎小多ひ修明門院 仙洞の后の方へ此処より  
他家をきくも其奥小

あつたをえうらなは法法はあつたをうらくえはる袖のたれを  
此湊より舟船あつた雲の波を漕るる隠岐の国小上り多小由野とく奇  
げなる庵の内小入多小寄来る波の音高く梢を傳ふ嵐の声夜へ探

の叫ぶの音信中人もる初へ帰らんはてとぬし悲の餘り  
我家隆卿此曲を初め承後便小詠くまきける  
家隆卿此曲を初め承後便小詠くまきける  
三昇をせし歌入る

後鳥羽院  
龜菊  
明石の浦  
詠歌の圖



星月夜六編卷之三

寝えしきろぬ依やうく悲れをあり磯浪紅曉の

同廿二日新院ハ佐渡国へ遷れ多々也母后修明門院の也歎世の類も

すくとも一なる。仙洞ハ隱岐也子ハ佐渡西の空と北の雲と引これ傾

く月めを隱岐の也よまをを思ひ出初ハ佐渡の便りくと悲多ふそ埋

る。仙洞の也母后七条女院老の也身小のり帰洛のりま日めあ

らんと泣明し多めハ隱岐の也所を也あ不致をそそく泰多侍

たうちを乃絶中くく徳島の牙死風くうさめよのそまは

七条院也返し

中くよ我次風乃終るよ一きづれあまはそぞあはる

扱又七御門院中院ハ計美不与一あさる也ハ関東より汝汰るりふ

自ら仰せらるる。仙洞配所ふ一一く我身於不安住もろ不孝あらは遠

處(迂)くはとくはもあも(関東)へ伺ひくるふ此上りく十月土佐國(迂)

恭らまると阿列の山中ゆく大雪降出駕興丁も昇ちるをけるあそ打涙

ふ

阿波國不入ひく。也父仙洞の也身の上と召やせまひ

浮世のちかほとそそ生とけを理あも我涙くれ

かへく仙洞の御子六条宮雅成親王ハ但馬へ冷泉宮頼仁親王ハ備

前の児嶋へ殺さると今幸ゆる悪年めく云院二宮遠嶋ふけさ

と公卿殿上人刑戮不逢ゆるうと。貴賤時節の變を歌ひなほ北条

時房以下。都を引拂ひ鎌倉不帰けは此度戦功の葦餘ヨの恩地

を加賜也。戦乱治りたれば翌年改元也貞応元を午の春ハ迎萬民喜

を

を

を

悦の眉を閉ける。同三年又改元元仁元甲申六月十三日。執権北条義時病死。其室家へ伊賀式部丞光宗姉あり。後妻あり。泰時へ継子あり。悪し。幼君を押し退け泰時を打殺す。三浦義村が督宰相。実雅卿を奥東の武將となし。我生忽四郎政村を執権とす。悪謀と巧まる。不黨類餘り出来既不復を發せしむ。及く露頭。後室へ伊豆の北条へ押し退け。其弟光宗へ信列へ実雅卿へ裁前。流され餘類流罪追放する。政村へ聊知らざる。政村三浦義村へ命せし。泰時と和談せしめしむ。執権へ泰時相續し。北条時氏時盛を京六波羅へ居置し。西六波羅と云。其翌年嘉禄元酉。六月大江廣元入道覚阿八十二歳歿す。卒公せし。鎌倉の古老賢徳の君子るれば四海皆歎惜とく。續く七月十二日。從二位禪尼

平政子六十九歳歿す。逝公同き十月鎌倉の幼君八歳歿す。元服す。其諱を頼經とす。翌二年。丙戌正月。武將宣下。及く。今ぞ諸臣安堵の心をなす。日本國中一統不静謐。弓を備。太刀を鞘。小治る世。不遇。執権北条武藏守泰時。賢者也。仁政を布。施衆を憐。無の治。化行。と五日の風。枝を鳴。十日の雨。塊を壊。天地和。順日。月清明。萬民戸。を遺却。御代の壽。鼓腹。樂けるぞ。珍圖け。

星月夜頭晦録六編卷之三終

